

浦上天主堂

ともしび
共生委員会ニュース

2018 年度　5 号

2019 年 3 月 20 日版

『原爆と沈黙～長崎浦上の受難～』をみて

69 期（現高 1）では、平和教育、修学旅行事前学習の一つとして、NHK　E テレにて 2017 年 8 月 12 日に放送された『原爆と沈黙～長崎浦上の受難～』を鑑賞しました。
以下、鑑賞後に生徒に出した課題と、その中から学年の先生が取り上げられた生徒の意見をご紹介します。

（1）印象に残ったこと、初めて知ったことなどを書き出してみましょう。

1945 年８月９日 11 時２分、原子爆弾が浦上町に落ちた。被爆した中村さんは被差別部落に暮らしていて、被差別部落に住む人々は、靴職人をして生計を立てていた。原爆の後、住人は町を離れ中村さんは長崎に移住。しかし、被差別部落に住んでいたこと、被爆して髪の毛がなかったこと、伝染病のように誤解されたことから「浦上のピカドン」「原爆」と呼ばれるなど二重の差別を受ける。自分のことを話す事はできないし、原爆を落としたアメリカへの怒りの感情も表すことができなかった。戦後、長崎市は市内に被差別部落はないと報告するが、古地図に「えた」と書かれた部分があることを記者が発見し、1976 年に部落解放運動長崎支部ができる。そして被爆者が体験を戦後初めて語りだす。「戦争は人間の仕業であり生命の破壊である」

（HR108　S.Y.）

（2）人の差別感情の背景にはどのような要因があると思いますか？
国内、海外を問わず、事例を一つ上げて、説明してみましょう。

人の差別感情を生む要因は大きく分けて２つあると思います。一つは帰属性です。少数の人を排除して多数派を作り群がることで安心感を得ようとします。そしてもう一つは、優越感です。自分よりも立場の低いものを作ることで、他人より優れていると言う優越感を得ようとします。いじめも差別の一例です。いじめられる人は何も悪いことをしていなくても、ある日いきなり仲間外れにされたり嫌がらせを受けたりします。結局はいじめることで自分が優位に立っていると錯覚を起こしているのだと思います。そんなひねくれた感情によって何も悪くない人が巻き込まれ、嫌な思いをするのです。差別はこうした誰かの自己中心的な感情によって引き起こされるので、行動を起こす前に、もし自分が差別される側だった場合どう思うかを考えた上で、本当に正しいのかを判断するべきだと思います。そうすることで世界から少しずつ差別がなくなり、今よりもっと平和になると思います。

（HR110　S.Y.）

Aoyama Second Chance 活動報告

Aoyama Second Chance

私たち Aoyama Second Chance (ASC)は日本の食料問題について深く考え、微力ながらも食糧問題の改善に向けて様々な取り組みを行っている団体です。

現在、日本では約 6 人に 1 人(約 2000 万人)が貧困線以下で暮らしています。食糧にもありつけず生活保護や地域の炊き出しを頼りにしている方々がいる一方で、日本は食品ロス(本来食べられるにもかかわらず捨てられている食料)の問題も抱えています。実に日本国内では、年間の米の生産量(839 万トン)とほぼ同じ割合である 500~800 万トンもの食品が廃棄されたり、処分されたりしています。

この二つの大きな社会問題に対して私たち ASC は、まだ食べられるのに様々な理由で処分されてしまう食品を、食べ物に困っている施設や人に届ける活動(フードバンク)によって食料が不足している部分と余っている 部分との架け橋となる役割の手助けをしています。また、私たちがフードバンク活動をする上 で参考にしているのが「セカンドハーベストジャパン(以下:セカンドハーベスト)」と言う日本 で初めてフードバンクを始めた団体です。「セカンドハーベスト」は食品製造業者、卸店、輸 入業者と提携し、余剰食料の寄付を促し、その食料の貯蔵や必要な人への配達をする、言わば「食の仲介人」のような役割を担っています。私たちは、このような団体を参考にすることによって、高校生という立場から何ができるかを考えています。 今回は私たちがどのような活動を行なっているのかを紹介したいと思います。

ASC は主に三つの活動を行なっています。

１つ目は、一昨年から行なっている、「フードドライブ」という家庭から寄付できる加工食品を学校で集める活動です。皆さんの積極的な参加のおかげで毎年集まる量は増え、寄付される食品の質も高くなっています。この活動を通じて一人でも多くの生徒や先生に日本の食糧問題に目を向けてもらいたいと思い、今後も実施する予定です。

２つ目は、去年からグローバルウィーク中に実施している、「食べ残し NO ゲーム」を通じて外食産業での食品ロスに興味を持ってもらう活動です。実際にこのゲームに参加してみて初めて外食産業、企業側の商品と顧客へのサービスのバランスをとる大変さを私達は学ぶことができたので、皆さんにも是非５月のグローバルウィークでは ASC のこのゲームに参加してもらいたいです。

３つ目は、2020 年に本校で行われる防災備蓄品廃棄時に備蓄されている食品をフードドライブでセカンドハーベストへ輸送するために予算や手配の準備を進めることです。前回の防災備蓄品廃棄時にはまだ ASC はなく、ただ廃棄されてしまったと聞いています。今回はそのようなことがないようにしっかり準備していきたいと思っています。

また他にも、ASC に参加してくれた生徒とセカンドハーベストの事務所を訪問したり、そこで行われているボランティアに参加したりと不定期ではありますが様々な活動に参加しています。

まだ校内でも私たちの活動を知っている生徒はごく僅かですが、来年度はより一層積極的に活動し、一人でも多くの生徒が日本の食品問題に興味を持って一緒に取り組んでいけたらと思っています。

宮古海産物の再販

HR210　H. K.

HR210　T. M.

私達は８月に宮古訪問プログラムに初めて参加し、東京に戻ってきてから宮古のためにできることは何か２人で考えていました。そこで思いついたのが文化祭で販売した宮古物産の美味しさをより多くの人に知ってもらうことで、再販をしたいと考えました。

そしてただの再販だけでなく、宮古について知ってもらうために、以下のようなチラシを製作し、東京に住むみなさんに震災について、宮古について少しでも考えてもらうきっかけを作りました。再販では注文表や引換券、チラシなど手作業が多く、２人でこなすことは簡単ではありませんでしたが、チラシが好評だったり、物産を美味しいと言ってもらえて、とても達成感が得られました。来年度もまた何か新しいことが出来たらと考えています。



宮古の海と奇岩「三王岩」



2018 年度訪問でのワカメ茎取り体験

宮古便り

～特別号～

私達は8月に3泊4日で岩手県宮古市を訪問してきました。宮古の美味しい物産を購入して下さった皆さんにもっと魅力をお見せしたいと思います。

交流

災害公営住宅に住んでいる方と交流をし、いくつかのグループに分かれて震災前に過ごしていた話や震災後の災害公営住宅での生活などのお話を聞きました。皆さん仲が良く、身近な人を亡くしていても笑顔で前を向いて生活していることがすごく印象的でした。



そして宮古北高校と交流をし、復興をテーマにディスカッションをした後、紙にまとめて発表しました。宮古に住んでいる高校生と交流することで東京に住む私たちと現地の高校生では復興についての捉え方、例えばもうすでに復興しているという人がいたり、復興はまだまだだと言っている人がいたりして考え方が異なっているということを実感しました。また、今年度の高等部祭で販売されたラバーバンドとタオルのデザインは現地の高校生と文化祭実行委員で話し合い決めていますが実際この時に決定しました。現地の方と交流するほど新しいことを知ることが出来、時間が過ぎることがあっという間のように感じました。



また、来てくれただけで嬉しい、知ろうとしてくれてるだけで嬉しいと言ってくださる方が多く、すごく驚きました。

潮風のハーブ園

一家が震災以降に始めた事業で50~60種類のハーブを無農薬かつ全て手作業で育てています。ここで育てられたハーブを使ったハーブティーはインターネットや百貨店で全国に向けて販売されています。



このハーブ園では様々な体験を行なっています。私たちは左の写真のようなハーブ石けんを作りました。他にも下の写真のようなハーバリウム作りや、ハーブの収穫体験やアロマキャンドル作りなども出来ます。また、ハーブ園の横にある畑でとれたトウモロコシをいただきました。とても甘くておいしかったです。



学ぶ防災

宮古で行われているもので震災の事を少しでも多くの人に伝えているがイドさんと一緒に津波が来るまでの時間を少しでも延ばした堤防や震災遺構の田老観光ホテルの中で津波の映像を見た後、避難道を歩きました。私たちは今回2時間コースに参加しました。実際に震災の跡や工事をしている堤防を見て、東京にいるだけでは分からない情報をたくさん知ることが出来ました。最も印象的だったことはガイドさんが震災の日、職場でリターンをしてから駐車したことで素速く避難出来たけれどもしそのまま駐車していたら避難の際にUターンすることになり時間取っていたら亡くなっていたかもしれないということです。



今回実際に宮古市に行ったことにより、東京では知ることの出来ないような地元の方々の話を聞き、宮古市の自然の豊かさや食の魅力を知るとともに、津波の怖さを知ることが出来ました。そして私たちは津波を実際に経験していない人たちにも伝えていかなくてはいけないと思いました。皆さんも是非一度訪れてみて下さい。

《当日配布したチラシ》